

ラオスの森の民が
わたしたちに教えてくれること

東京ドキュメンタリー映画祭 2019
特別上映

クラトヴォ国際民族学映画祭(マケドニア)
正式出品

IUAES 先住民・民族誌映画展(メキシコ)
正式出品

ICAS12 フィルムフェスティバル
正式出品

森のムラブリ

インドシナ最後の狩猟民

金子遊 監督作品

出演：伊藤雄馬、パーロン、カムノイ、リー、ルン、ナンノイ、ミー、ブン、ドーイ、ブライワン村の人びと、ファイヤク村の人びと

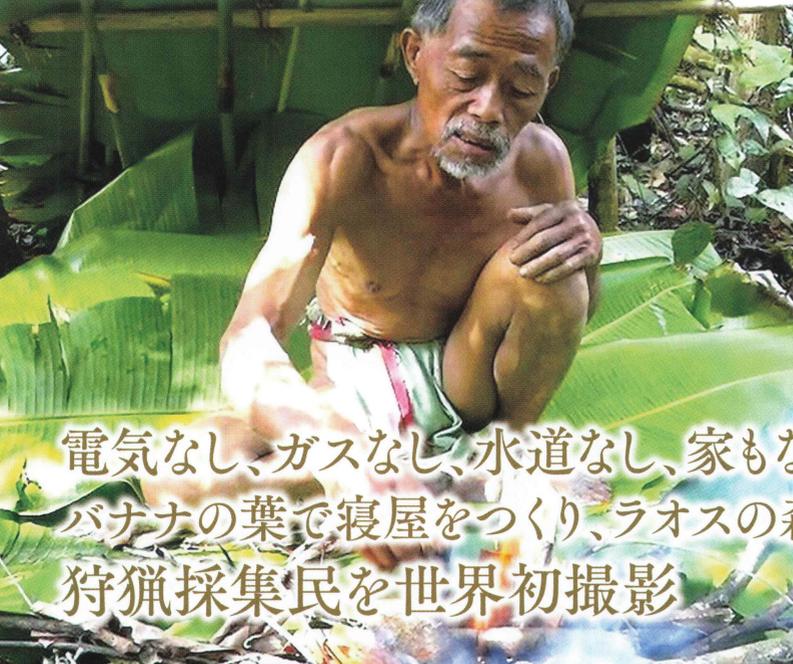
撮影・編集：金子遊 現地コーディネーター・字幕翻訳：伊藤雄馬

パブリシスト：登山里紗 デザイン：三好通 製作：幻視社 配給：オムロ 幻視社

2019年 / 85分 / ムラブリ語、タイ語、北タイ語、ラオ語、日本語 / カラー / デジタル

人食い伝説によって、たがいに憎しみあうムラブリ族に
日本の言語学者が対話の力で融和をもたらす
映像人類学の可能性を切りひらく、かつてない冒険！





電気なし、ガスなし、水道なし、家もなし バナナの葉で寝屋をつくり、ラオスの森をさまよう 狩猟採集民を世界初撮影

謎に包まれた少数民族のノマド生活に迫る、映像人類学的なドキュメンタリー

タイ北部ナーン県のフワイヤク村は、400人のムラブリ族が暮らす最大のコミュニティ。男たちはモン族の畑に日雇い労働にでて、女たちは子育てや編み細工の内職をする。無文字社会に生きるムラブリ族には、森のなかで出くわす妖怪や幽霊などのフォークロアも豊富だ。しかし、言語学者の伊藤雄馬が話を聞いて歩くと、ムラブリ族はラオスに住む別のグループを「人食いだ」と怖れている様子。

伊藤とカメラは国境を超えて、ラオスの密林で昔ながらのノマド生活を送るムラブリ族を探す。ある村で、ムラブリ族が山奥の野营地から下りてきて、村人と物々交換している現場に出くわす。それは、少女ナンノイと少年ルンだった。地元民の助けを得て、密林の奥へとわけ入る。はたして今も狩猟採集を続けるムラブリ族に会えるのか？ 21世紀の森の民が抱える問題とはいったい何なのか？



伊藤雄馬(出演・現地コーディネーター)のコメント

生まれて初めて出会うムラブリ同士が、お互いの言葉の近さや遠さに驚きながら、接点を探る相互行為は、しかし、たどたどしいものでは決してなかった。どんな民族集団でも、分断があり、統合がある。この邂逅は、過去にもあっただろうし、未来にもあるだろうことに気づいた。分断と統合の交差するあの場面は、ムラブリという民族の普遍を見出す格好の資料であろう。

ゾミアの森の民に学ぶ、サステナブルで自由な生き方と人生の価値

バナナの葉と竹で寝屋をつくって野営し、平地民から姿を見られずに森のなかをノマド生活するムラブリ族。タイ人は彼らを「黄色い葉の精霊」と呼んだ。本作は、6ヶ国語を自由に話し、ムラブリ語の辞書を作ろうとする言語学者・伊藤雄馬とともに、足かけ2年ムラブリ族を追った人類学的なドキュメンタリー。伊藤はラオスで狩猟採集を続けるグループへの接触を試み、カメラは世界で初めてムラブリ族の謎めいた生活を撮影することに成功。ムラブリ族は

言語学的に3グループにわけられるが、伊藤が仲介となり、たがいに伝聞でしか知らないムラブリ族同士が初めて会う機会をつくりだす。また、現在は村に定住するタイのムラブリ族に以前の森の生活を再現してもらうなど、消滅の危機にある貴重な姿をカメラに収める。インドシナ半島の密林におけるサステナブルで、政府や法からも自由なアナーキーな生き方から、文明社会で暮らす私たちにも「人生にとって真に重要なこととは何か」が見えてくる。

公式サイト muraburi.tumblr.com @muraburi www.facebook.com/muraburi

金子遊監督の劇場公開作『ヘオグラード 1999』『ムネオイズム』『インベリアル』が「鳴滝 NARUTAKI」narutakifilm.comにて配信中

全国順次公開!

3月19日(土)よりロードショー

当日一般料金1,800円のところ

全国共通特別鑑賞券1,300円(税込)発売中!

[シアター]
イメージフォーラム

渋谷駅より徒歩8分 宮益坂上がり、次の信号を右入る
03-5766-0114 www.imageforum.co.jp
【全席指定/オンライン予約有】

